図書館員のつながり
-IFLAヴロツワフ大会を振り返って-

メタデータ	言語:
	出版者: 日本図書館協会
	公開日: 2024-01-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三浦,太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000195

◆ 小特集 IFLAヴロツワフ大会レポート ◆

図書館員のつながり
――IFLAヴロツワフ大会を振り返って――

三浦太郎

ポーランド開催

東欧の親日国として知られるポーランドは千年の歴史を有するが，それは周辺国との有為転変に翻弄されたものであった。18世紀にロシア・プロイセン・オーストリアに分割されて国家消滅の憂き目に遭い，その後もナチス・ドイツによる軍事占領や，ソビエト連邦影響下の共産主義独裁を経験している。レフ・ワレサ率いる「連帯」を中心に共和制が実現したのが1989年のことであった。

それから28年，第83回国際図書館連盟（IFLA）年次大会が2017年８月19～25日，同国西部シロンスク地方の中心都市ヴロツワフで開催された。同市はブレスラウ（ドイツ語），ボロスロー（ハンガリー語）の呼称でも知られるが，それはまさにこの国の歴史性に由来している。大会テーマは「図書館・連帯・社会」であり，ポーランドでの開催は1936，1959年（いずれもワルシャワ）に続き，三度目となった。

大会会場は「百周年記念ホール」（Hala Stulecia）である。このホールは，ナポレオン軍を破ったライプツィヒの戦い（諸国民戦争）終結から100年を記念して，1913年にドイツ人建築家マックス・ベルクの手で設計されたもので，約6,000人を収容できる円形ドーム（直径65m，高さ42m）を持つ。当時のコンクリート建築物としては世界最大規模を誇った。2006年に世界遺産（ポーランド国内の文化遺産で12番目）に登録されている。

▲世界遺産の百周年記念ホール

参加者は122か国から約3,100名を数え（前年比３％減），248のセッション（約６割が公開），69の企業展示，ポスター発表184件が行われた。日本からも56名（主催者発表）が参加し，本誌10月号NEWS欄に既報のとおり，護得久えみ子氏（東京子ども図書館）の口頭発表のほか，プレ会議・ポスター発表を含め，９件の発表が行われた。

開会式

開催前日の８月18日に役員会（GB）が開かれ，翌19日朝８時から分科会ごとに46に上るビジネス・ミーティングが開かれ，大会の幕開けとなった。夕方には，同じ国の関係者や特定言語資料を扱う図書館員などが集まるコーカス・ミーティングが行われた（アジア・オセアニアでは，中国，韓国，オーストラリアの関係者の集まりが開かれた）。

20日午前中には，初参加者向けのニューカマーセッションに続き，10時45分からメインコートで開会式が挙行された。本大会を最後に任期満了を迎えるドナ・シーダーIFLA会長から冒頭あいさつがあり，「この大会で見知ったことを，帰ってから10人の仲間に伝えてください。3,000人が参加す

れば，…とても多くの人びとが，その成果を共有することができるのです」と述べられ，本大会のテーマにも掲げられた図書館員の「連帯」の重要性が確認された。

続いてゲラルド・ライトナー事務局長から，IFLAグローバルビジョンの進捗状況が報告された。このプロジェクトでは，2017年４～６月に世界６地域で国際ワークショップが開かれ，世界140か国の図書館関係者が集まって，図書館の基本理念に関する認識や今後の課題などについて意見交換されたが，こうした新たな試みが紹介されている（日本でも７月，IFLA「特別なニーズがある人びとへの図書館サービス分科会」（LSPSN）委員長の野村美佐子氏（日本障害者リハビリテーション協会情報センター）が中心となり，国内ミーティングを行った）。

その後，アンジェイ・ドゥダ大統領からの祝辞，来賓あいさつと続いた。ピョトル・グリニスキ文化・国家遺産大臣は，2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を引きながら，情報アクセスの自由な保障に向けて図書館の役割が極めて重要であると指摘した[1]。また，トマス・マコフスキー国立図書館長は，ポーランドには国内約32,000館の図書館ネットワークを築いてきた歴史があり，資料のデジタル活用に加え，保存の議論も必要であると主張した。

▲盛り上がりを見せる開会式

祝辞の後にはヴロツワフ市の歴史をテーマとする現代劇が上演され，この国や都市がさらされてきた歴史性が参加者に印象づけられた。

この後，昼食休憩をはさんで，午後に公開セッションが９ほど実施され，夕方16時からは企業展示会場を中心にレセプションが行われた。企業展示ブースは，百周年記念ホール１階のメインコートを取り囲むように配置されており，参加者はワインなど飲み物を片手に，各企業の展示ブースを見て回った。

出展者は，例年，ダイヤモンド／プラチナスポンサーとしてIFLA大会を支援しているOCLCを筆頭に，シルバースポンサーのインフォア社，昨年のコロンバス大会をOCLCとともに主導したアメリカ図書館協会（ALA），来年の開催国マレーシアからマレーシア国立図書館（NLM），さらには出版各社やデータベース企業などであった。筆記具やクリアファイルの提供が参加者の関心を引くのは例年のことだが，ポーランド図書館員協会（PLA）のブースでは，自転車図書館などの描かれた子ども向けＴシャツが無料で配られ，開設から参加者が押し寄せていた。

▲ポスター発表には184件が集まった

企業展示の一画では，８月21～22日の昼に実施されるポスター展示の設営も進められ，掲示済ポスターの周辺では，あちらこちらでポスター発表者と参加者のやりとりも見られた。

ただ，筆者も今回ポスター発表を行ったが，ポスター展示の動線には不満の声も多く聞かれた。大概はパネル同士の間隔が狭く，奥まった掲示場所を指定されたポスターの場合，参加者に「分け入って」来てもらうイメージで，気軽に足を運んでもらいにくかったのである。

公開セッション

公開セッションとして行われた研究発表は約140に上る[2]。いずれのセッションも，IFLAの分科会（Section）や討論グループ（SIG），あるいは保存（PAC）や著作権（CLM）などの「戦略的プログラム」の常任委員が中心となってテーマを設定した

もので，ときに複数の分科会の間で連携しながら，2017年１月頃までに発表者を募って企画・実施されている。

セッションは２時間～２時間半に及ぶ。これまでの大会では，主に４～５件の事例報告と会場からの質疑が中心となる形が多かったが，今大会ではワークショップ（WS）形式が増えたように感じた。WSでは，テーブルごとに５～６名の参加者が座り，分科会委員がコーディネータとなって議論をまとめていく。さまざまな国・地域からの参加者各自が英語で意見を述べ合う「協働型」スタイルに特徴がある。

▲分科会で話し合う参加者たち

たとえば，「力強い図書館情報学教育の構築（BSLISE）」をテーマに開かれたセッション235（24日10:45～12:45）では，図書館情報学教育分科会（LIS）（日本から小田光宏氏（青山学院大学）が常任委員を務める），図書館理論・研究分科会（LTR）（井上靖代氏（獨協大学）が２期常任委員を務めて満期を迎え，本大会から新たに下田尊久氏（藤女子大学）が常任委員に加わった），および発展途上国における図書館情報学教育SIGの３組織の共催のもとで，まず図書館情報学教育の国際比較調査に関する報告があった後，WS形式で議論が行われた。

討議の際は，各国の教育レベルや資格の横断的利用可能性，調査手法など６テーマについてテーブルごとに話し合われ，事後，コーディネータが意見集約して発表した。筆者は「今後の調査」をテーマとするテーブルについたが，論点として，各国に対して全体状況の調査を行うのか，あるいは図書館情報学教育・資格に必要なスキル・専門分野を調査するのかという点や，調査対象をどう設定するか（図書館協会に調査票を送るのか，あるいは大学や教職員・学生などを対象とするか）といった事項が議論された。国ごとの教育状況の違いを認識し，国際的に問題意識を共有して，今後の枠組みを検討していく上で，こうした討議の機会は有効であったと思われる。

関係者の交流

８月21日には，現地の旧市街広場近くのRestaurant Artで33名の日本関係者が集まり，夕食をともにすることができた。開会にあたり，国立国会図書館長の羽入佐和子氏からごあいさついただき，その後，各参加者が歓談を楽しんだ。

この夕食会の実施にあたっては，本誌５月号にIFLAヴロツワフ大会へのおさそい記事を執筆いただいたアグニェシカ・ホイフェルト氏（国立ヤギェロン大学東洋学研究所図書館）を介して，現地の図書館員の方を紹介いただき，ポーランド料理で有名な同レストランを事前予約することができた。７月時点で，こちらから連絡可能な日本人参加者に呼びかけたほか，ホーナー日本交流基金プログラムで日図協と関係の深い米国アリゾナ州図書館協会（AzLA）のスミタ・ジョシプーラ氏（同プログラム委員会委員長）が，ポスター発表のためヴロツワフに来られると聞き，この夕食会にも顔を出していただいた。

翌22日には，百周年記念ホールに隣接した庭園で，全体の公式イベント「文化の夕べ」が開催された。このイベントでは，テントで出される一口料理やアルコールを含めた飲み物を参加者各自が楽しんだほか，1970～80年代のディスコ・ミュージックに合わせて踊ったり，色鮮やかにライトアップされた噴水のショーを眺めたりすることができた。あいにく夜の空気は冷たく，筆者は早めに失礼したが，日本からの参加者の何人かは夜中の０時過ぎまで各国の参加者と歓談したり，心ゆくまでダンスを楽しんだと聞いている。

セッション以外にこうした交流の機会を通じて，それぞれが個人的なつながりを広げていくことは，国際大会に参加する大きな意義のひとつだと思われる。

▲図書館見学も楽しい（写真は市内の「メディアテカ」）

総会・閉会式

８月23日には講堂で総会が開かれた。71の参加機関の出席を以て総会は成立し（定足数66），会計報告などが行われた。

2016年の決算報告では，収入292万ユーロ，支出284万ユーロと発表された。前年比で収入60万ユーロ，支出70万ユーロと大幅な増額だが，予算規模が拡大した大きな要因が「ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団」からの寄附金の伸びであった。その額じつに154万ユーロ（前年比1.9倍増）と，収入総額の53％に上った。同財団からの寄附によって，「キー・イニシアチブ」や「レガシー・プロジェクト」といったIFLA活動の柱が支えられる構造となっている。

いっぽう，主要財源のひとつ会費収入は72万ユーロ（前年比１万ユーロ減）と，急激な改善は見込めない状況である。IFLA大会開催に伴う収入も頭打ちとなっている。2014年リヨン大会で12万ユーロの黒字額が計上されたが，2015年ケープタウン大会で5.5万ユーロ，昨年のコロンバス大会では8,000ユーロにまで黒字幅が減少している。また，支出では85万ユーロが人件費に当てられており，全体に占める割合が30％と高い。

議事の約半分は翌24日の閉会式に持ち越された。閉会式では，IFLAの活動に功労のあった人びと・団体への各種表彰や，最優秀ポスターの公表のほか，シーダー会長からの最後のあいさつ，グロリア・ペレ＝サルメロン次期会長や新理事会メンバーの紹介などがあった。また，本大会全日程を参加者の声などとともに映像で振り返った後，来年の開催国であるマレーシアから観光大臣の招待スピーチやPR動画が放映された（2019年開催国については，年内発表が待たれている）。

とりわけ印象深かったのは，ヴロツワフ市のラファウ・ドゥトキェヴィッチ市長のあいさつである。市長が，「ヴロツワフに数多くの国際会議を招致しているが，私はナショナルにではなく，インターナショナルに考えることこそが重要だと考えている」と発言したとき，会場から拍手が止まなかった。国の利害を超えて，国際的にどのように「連帯」し，結びつきを強めていくか。本大会のテーマであるとともに，現在，各国・地域が抱える社会的課題でもある。その解決に向けてどのような姿勢で臨むのか，参加者間で意識が共有されたように感じた。

▲中央駅でも図書館が人びとを迎えた

次回のIFLAクアラルンプール大会は2018年８月24～30日の開催となる。IFLA分科会常任委員の方々をはじめ，現場の図書館員，大学の研究者，大学院生など，図書館関係の皆さまのご参加を，心よりお待ち申し上げております。

［注］

1）「持続可能な開発のための2030アジェンダ」については，2017年10月13日に開かれた第103回全国図書館大会第22分科会でも取り上げられた。妹尾靖子氏（国連広報センター）が制定経緯を報告し，河村宏氏（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）が図書館界との関わりを報告したほか，コートニー・ヤング氏（アメリカ図書館協会），オ・ドングン氏（韓国図書館協会）から，米韓の取り組みが紹介されている。

2）発表レジュメの多くは，“Conference Programme”［http://www.professionalabstracts.com/iflawlic2017/iplanner/#/grid］で見ることができる（最終アクセス日：2017年９月14日）。

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC10：010.6　BSH：国際図書館連盟］